
スライドマン | ファインドケース

fordforest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライドマン－ファインドケース

【著者名】

N1230C

【作者名】

fordforest

【あらすじ】

ある日、フルードはインフォーマーを通じてシティ管理局からスライドマンと言う人物を探すよう依頼される。フルードはやる気ゼロで仕事を始める。

ケース1—検索依頼

深夜一時十七分。

第三区画の片隅にある小さな一軒の店。看板には”プルド探偵事務所”と書かれていた。店の中には黒のフカフカソファーに寝そべる一人の男がいた。男の名は”プルド探偵事務所”的主、プルド。そこに一人の男が店の中に入る。

「プルドさん、起きてください。プルドさん」

男はプルドの身体を揺さぶる。

「う～ん、あと五分と一分の一秒だけ」

「ふざけないでください！」

男はプルドの腹にかかと落としを決める。プルドは「ペコゴアッ！」と奇声を挙げてそのまま気絶した。

「しまったー！」

男は慌てて再びプルドの身体を揺さぶる。

三分後。

「あーー瞬だけ川の向こうから先祖様が見えた気がしたぞ」

プルドは右手で腹をさすりながら男に文句を言つ。男は「すみません、急な依頼が舞い込んだもので」と返す。

「で、ミノス。依頼とはなんだ？」

プルドは顔を引き締める。ミノスと呼ばれた男はプルドに一枚の紙を手渡す。紙には薄く、”シティー管理局”と表記されている。“管理局から””スライドマン”と呼ばれる人物の検索が依頼された。報酬は一千万ブル。拒否の場合はシティー管理局に対する反逆罪とみなして逮捕することです

「分かつてゐる分かつてゐて。憲法第六条だろ。シティに忠誠を誓え。シティに逆らうべからず。それぐらいガキでも分かつてゐつて！」

プルドは怪訝な表情をしながら机から「ルトデルタエリートカスタムエディションを取り出し構える。

「それにしてもスライドマンと言えば二年前の”ドーンステインガー”の補助犯だつたはずだ。それを今更探すたつて何が？」

「管理局からのコネクターからは奴が目覚めるとしか」

ミノスの言葉にプルドは顔をしかめる。

「目覚める?」

「ええ」

「……ここ数日の魔力の淀み……そして”スライドマン”か……ありがとな」

ミノスは「それがインフォーマーとしての仕事ですか」と答える。そしてミノスは店を後にする。残されたプルドは呟いた。

「姿無き”ドーンステインガー”のバックアップ……か」

そしてプルドは再びフカフカソファーに寝そべる。直後にいびきが店内に響く。

十時間四十分後。

プルドは大きなあぐいをしながら起き上がる。

「やべ、デルエリカスを仕舞うの忘れてた。やべえやべえ」

そんなのんきな独り言を言いながらプルドは魔道パソコンを起動する。

「ええっと”スライドマン”つと」

プルドは検索サイト”グッグレ”にアクセスし、キーワード入力欄に”スライドマン”とキーボードで打ち込む。そしてマウスを動かしSEARCHボタンをクリックする。すると検索結果には五千万と言う数値が表記されていた。

「やっぱし”ドーンステインガー”関係はヒットしやすいな」

そんなことをぼやきながらプルドは次々とページを開いていく。

三時間後。

「うう、腹減った。だいぶ資料も集まつたし小休止とするか」

プルドは腕を伸ばしながらそう呟き。店を後にする。

その数秒後に隣に立てられている小さな料理店”ボースティン”

にプルドが入る。

「いらっしゃいませ……つてプルド、またアンタなの？」

プルドを迎えるのは一人の若い女。

「ああ、エニス。腹減ったからな。とりあえずいつものセットで頼む」

「はいはい、レバーラ炒め定食のオーダーが入りまーす！」

エニスと呼ばれた女は厨房に戻る。プルドは腕時計のバンドを引っ張る。そこには先ほどまでプルドが見ていたページが映し出されている。プルドの腕時計は特殊なバンドで出来ており彼の見た物をバンドに記憶させることが出来る。

「二十年前の”ブルーミスト事件”、そして三年前の”ドーンステインガー事件”か。どちらにもスライドマンが発生していた情報があるが、一体どんなつながりがあるのか」

プルドがそう呟いているうちに彼の目の前にレバーラ炒め定食が置かれた。

「サンキユッ。ではいたらきまーす」

「もう、そんなに慌てないの」

プルドはエニスの言葉を聞く間もなくガツガツと食べ始める。

「やはりレバーラ炒めはつまい」

ケース1—検索依頼（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】

わーい。レッドボールの世界観で別の話だーい。

レッドボールが殺伐とした感じなのでこつちはコルコルで行きたい
と思いきや話しがものすごくヘヴィーすぎ。

なんだか話がものすごく見えないのでどうしたらいいのやらこ
んともかんともやれやれ。
続きを読むかどうか不安です。

ケース2—シティーライブラーー

四十分後。

「ふいー。『ツソツサンつと』

プルドは腹をさすりながら言つ。それをあきれたように聞いたエニスは「どういたしまして。代金はまたツケ?」と言つた。
「ああ、月末払いで頼む。一千万ブルが入りそうな仕事が来たものでな」

プルドはそう告げ残して店を後にする。

二十分後。第三区画シティライブラリー。

世界各国、ありとあらゆる書物が集まる区画シティライブラリー。第三区画にも例外なくシティライブラリーはある。プルドはライブラリーに入り司書に尋ねる。

「すみません、過去の事件の資料をまとめてある場所ってどこですか?」

「ええと、身分証明書を提示してください」

プルドは胸ポケットから一枚のカードを司書に手渡す。

「ええとプルド・エティケット一級探偵免許……はい。分かりました」

司書はカードリーダーにプルドから手渡されたカードを差込み、パソコンのキーボードを叩く。

「セントラルライブラリーマザーから許可が下りました。奥のエレベーターから地下二十階のところがケースライブラリーフロアです」

「ありがとう」

プルドは司書からカードを返してもらい、奥のエレベーターへ向かう。

ケースライブラリーフロア。

その階の入り口には厳重な扉がプルドの目に飛び込む。プルドは扉にあるカードリーダーに差込む。すると扉から重量感ある音が響いた後、開いた。

「さてと資料を漁るとしますか」

プルドはビターチョコを口に含みながら中に入る。ケースライブラリーフロアは広い空間と膨大な書庫で構成されている。

「相変わらずケラフの空間拡張魔法は驚くなあ」

プルドはすぐ近くに設置されている端末に手を触れる。すると彼の目の前に無数のホログラムが浮かび上がる。

「検索キーワード”スライドマン”及び”ドーンスティングガー事件”完全一致」

プルドのデマンドワードに端末は反応し素早くホログラムに複数の資料の名称を一斉に挙げる。

「検索一致資料のキャリングデマンド」

再びプルドのデマンドワードに端末は反応し、書庫全体からプルドの要求にあつた資料を彼の元へ飛ばす。次の瞬間にはプルドの前に綺麗に積みあがっていた。

「やつぱりケラフの端末も驚くなあ」

プルドはしみじみに思いながら大量の資料を手にする。次の瞬間ににはプルドは資料に埋もれていた。

「お、重い」

皆大好き――――笑顔！

「ええっと、”スライドマン”……やつぱり二年前の”ドーンスティングガー”と関係あるか」

プルドは資料をボウと眺めながら呟く。

「”スライドマン”の生い立ち……第一区画”ルフトス原子力発電所事故”……第七区画の”ドーンスティングガー”……よく考えたら第三区画関係ないじゃん！」

プルドはポケットから携帯電話を取り出し、ショートカットキーを押して掛けた。

「ハハハ。シティ管理局に報告です」

『ハハハシティ管理局のハハヌ管理官です。プルドさん、どうしましましたか?』

「第三区に”スライドマン”いないはずだ。いるとすれば第一区の”ルフトス地区”しかない。”スライドマン”……いや、”パレス・ボルティアグ”は”ルフトス地区”に異常なまでの帰属意識があるはずだ」

『分かりました。上に報告して置きます。とりあえずあなたの口座に報酬を振り込んで置きます』

「分かりました」

プルドは電話を切り、呟いた。

「ああ、めんべくせい仕事だった」

ケース2—シティーライブラー（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】

第一話。

スライドマンの本名が発覚したり、魔法も普通に登場したり、もう最終回みたいな感じの流れだつたりとわけわからない。

実を言うと俺が話を作っているわけじゃなく話が勝手に一人歩きしてる感じなんです。

適当に衝動でキーボードをダッダカダッダカと打っていたらいつの間にかこんな話に。

ひょっとしてこの話に嫌われてる？

第三話の完成度が不安だ。

ケース3—廃墟へ

今日も元気にレイニー・サイクリング！

翌日。

プルド探偵事務所。

午前十一時五分。

「ねみー」

プルドは相変わらずフカフカソファーで寝そべっていた。その時プルドの携帯に電話が鳴る。

「ふあーい、こちらプルド探偵事務所のプルドでうえーつす」

『こちらシティ管理局です。あなたに新しい依頼です。詳しくはインフォーマーにファイルを渡してありますのでそちらを参照してください』

「ええ～。やりたくないッス。やりたくないッス。俺のハートが燃えてるッス」

『拒否の場合は逮捕も』

「分かりました分かりました！」

プルドは必死で全力で秒間一千回ものペースで頭を下げる。

六時間後。

『第一区画ベイルー駅。ベイルー駅。お降りの際は忘れ物に気をつけてください』

区画間鉄道から降りるプルド。第一区画ベイルー駅。

かつて主要駅の一つとして数えられたこの駅も今では寂れてしまつた。その理由として第三十六区画に首都機能がほぼ移転されてしまったからだ。

「さてと、”スライドマン”こと”グーノ・エディン”の隠れ家へ向かうか

プルドはコルトデルタエリートカスタムエディションのスライドを引いてホルスターに差込み、タクシーを拾つ。

「お客さん、どちらまで？」

タクシーの運転手に免許を見せる。

「ルフトス地区の旧発電所まで」

タクシーの運転手はコクリと頷き、アクセルを踏む。プルドは窓の外の景色を眺めながら呟く。

「働いたら負けって本当かな？」

最近の世の中は複雑なのね。

二十六分後。

プルドを乗せたタクシーはルフトス地区の旧発電所前に止まる。

「ありがとうございます。代金は免許で引き落としてくれ」

タクシーの運転手はカードリーダーに免許を差込み、テンキーを叩いて、エンターキーを押してから免許を引き抜き、プルドに返す。

「またのじ利用をお待ちしております」

タクシーの運転手のその言葉を聴きながらプルドはタクシーから降りる。

「ここが旧発電所か。まるで廃墟だ」

手にしているコルトデルタエリートカスタムエディションを構えながらプルドは呟く。彼の目の前には五人の浮浪者が立ちはだかっていた。

「へつへつへ。にいちゃん、ちょっとだけ金を貸して欲しいんだがなあ」

浮浪者たちは手にしている大型のナイフを構えながらプルドの元ヘジリジリと近づく。

「これだから第一区画”ロストシヴィライゼーション”へは来たくなかつたよ」

そう言いながらプルドは素早く構えて、銃を撃つ。放たれた一発

の銃弾は右の一人の頭を貫いた。

「しゃらくせえ！」

真ん中の男はプルドに向かってナイフを突き立てて走り出す。プルドは素早く見切り、左足で男の腹部に蹴る。

「がほつ！」

男は腹部を両手で押さえ、地面に伏せる。プルドは残った二人に對し落ちていたナイフを投げつける。スローイングされたナイフは残った二人の男の頭をそれぞれ一本ずつ刺さった。うずくまつていた男にプルドは近寄り、右足で男の頭を強く踏みつけた。グシャリと肉がつぶれる音がしてプルドは右足を大きく振る。

「……あーあ、せっかくのお気に入りのジーンズが台無じじゃん」

プルドはため息をつきながら廃墟の奥へと入っていく。

ケース3—廃墟へ（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】

な、長かった（制作期間が）

レッドボールとは違つてスライドマンは中々動いてくれない。

例えるとすればレッドボールは従順な妹でスライドマンはツンデレな幼馴染な感じ。

この分だと第四話の制作期間が……想像しただけで軽くランニングハイウェイムーンサルトオーバーハードチキン。

ケース4—死体

携帯電話が鳴り響く。

プルドは携帯電話を取り出し、出す。

「はいはい、こちらプルドダメ人間製作所五番」
『「プルドさん！ インフォーマーのミノスです。』』

電話の相手はミノスだった。

「ほひほひ、何のようだ？」

『「スマートマンに関する日撃情報をそちらのMPDAに転送します」』

「了解」

通話を切り、ポケットからMPDAを取り出す。

「データインモードに切り替えて、ミノスにてデータマンドを送る
つと」

MPDAを操作して数秒後にMPDAが光り輝き空から光線がMPDAに降り注いだ。

「相変わらずデータ送受信は派手すぎるなあ
プルドはしみじみとつぶやいた。

今日も明日もダルダルダルメシアント！

「データによればこの地下だな」

プルドは目の前の階段を眺めながらつぶやく。手にしているゴルトデルタエリートカスタムを構える。

「暗つ！」

プルドは悪態をつきながら空いてる左手で懐中電灯を持ち、明かりをつける。

「うつ」

懐中電灯の光を照らした先には腐敗した死体が転がっていた。

「ここはタイの口 ナプラか？」

その頃、どこかの運び屋集団とその行きつけの店の店主が同時にくしゃみをしたとかないとか。

プルドはPDAを死体の上にかざす。

「DNAチェック」

PDAが光り輝き、死体をドーム状に覆う。

『一名該当あり』

「さて、誰だ?」

プルドはPDAの画面を覗き込む。そして目を大きく見開き、驚いた。

「う、うそだろ……」

画面には”パレヌ・ボルティアグ”と書かれていた。

「Mメール、送信先”シティ管理局”、内容”スライドマン”死亡。”ルフトス地区”第三発電所地下にて腐乱死体となつて発見。回収を求む”、Mメール送信」

スカイドライ。

ケース4—死体（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】
はい、手抜き確定。ぜんぜん物語と世界が動いてくれない……。

ラストケース一未解決

数日後。

プルドはエニースの元へ向かう、ほくほく笑顔を浮かべながら。

死体発見から数時間後にプルドの銀行口座に通常では考えられない金額が振り込まれていた。

「ういーっす。WAWAWA忘れ物を届けに参りましたーっと」「どこの谷 よりしくな台詞を混ぜながらプルドは食堂の中に入る。

プルドはPDAの画面を眺めながらつぶやいた。

「結局、スライドマンは存在しなかった……か」

PDAにはスライドマンに関する事実が書かれたテキストファイルがあつた。そのテキストファイルは死体発見直後にプルドのPDAに転送されたものだった。

スライドマンとは力のこと。

スライドマンとレッドボールは常にリンクしている。

レッドボールプロジェクトが発動したとき、スライドマンプロジェクトが発動される。

逆もしかり。

このプロジェクトを総称してメサイアプロジェクトと呼称する。

なお、このプロジェクトの発動キーは以下の人物に当てる。

ルシアス・ジェヴィア。

ダウンガード・エヴィアント。

マジエスト・フォレア。

ブルード・ハイケット。

SLIDE MAN - FIND CASE - EOF -
There is no truth anywhere. Th
e truth is the one producing i
n the opposite. However, nobod
y understands the rule. Even t
he god.

ラストケース一未解決（後書き）

【あとがき一 ヘタクソケース】

と言つわけで最終回です。

あまりにも考えなしの行き当たりばつたり物語りでした。

そもそも小説と言えないほど表現力が乏しすぎる。

自分でも分かつていいけど……絶望的だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1230c/>

スライドマン | ファインドケース

2010年10月8日15時15分発行